慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シュル・ファシズムとネオ・ソシアリズム : バタイユ、ドリュー(1)
Sub Title	Le surfascisme et le néo-socialisme : Bataille et Drieu (1)
Author	市川, 崇(Ichikawa, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2011
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.101, No.2 (2011. 12) ,p.81(176)- 101(156)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	牛場暁夫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01010002-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シュル・ファシズムとネオ・ソシアリズム
——バタイユ、ドリュ——(1)

市川　崇

はじめに

1934年2月6日夜半、パリ、コンコルド広場を中心に繰り広げられた社会騒擾は、両大戦間期のフランス社会にとって大きな転換点をなす出来事であった。それは事件が、イタリアのファシズム、ドイツのナチズムの脅威の拡大を背景として、1936年の人民戦線内閣成立の発端となったからであり、他方で、1940年以降のドイツによる占領下に対独協力を行なう勢力がこの事件を境に明らかな伸長を見せることになったからである。退役軍人連合や極右団体の示威行動は新聞を通じて前日までに予告されていたし、より小規模であったとはいえ同様の示威行動をパリ市民は1月に幾度も経験していた。しかし、暴徒化した一部の示威行動参加者と警官隊との衝突が15名の死者、約1400名の負傷者、数百名の逮捕者を出すに及んだ2月6日の事態は、多くの市民を震撼させた。翌2月7日、8日には、『ル・タン』、『ル・フィガロ』、『ル・ポピュレール』、『カナール・アンシェネ』、『ユマニテ』など左右を問わずほぼ全ての新聞がこの事件の衝撃を伝えている。当然のことながら、知識人、文人の多くもこの事件に強い反応を示している。週刊誌『ヴュ』は早くも2月8日に特集号を出しているし[1)]、『新フランス評論』3月号でもバンジャマン・クレミュー、アラン、ドリュ・ラ・ロシェル、ラモン・フェルナンデズらが出来事について評論を寄せている[2)]。また周知のように、この事件をきっかけとして、3月には、ポール・リヴェ、アラン、ポール・ランジュヴァンを中心として反ファシズム知識人監視委員会が創設されている。

一般に極左と見なされるシュルレアリスト、またシュルレアリズムから離反し30年代初頭にボリス・スヴァリーヌの主催する民主共産主義サークルに参加していた、ミシェル・レリス、レイモン・クノー、そしてジョルジュ・バタイユらもその例外ではない。バタイユの政治評論「ファシズムの心理構造」の第二部は1934年3月に、民主共産主義サークルが刊行する季刊誌『社会評論』に掲載されている[3]。おそらくはこの日付上の近さを主な根拠として、一部のバタイユ研究者は、バタイユがこの事件に「非常な衝撃を受けた」と注釈している[4]。

ここでは、当時のジャーナリスト、知識人、また戦後の歴史家による事件解明の試みを参考に、その実相を改めて検討すると同時に、フランス社会全体に混乱をもたらしたこの事件へのバタイユの反応が、はたして他の知識人の反応からどの程度隔たっていたのかを、ドリュ・ラ・ロシェルの同事件についての解釈、そこから導かれ『ファシスト社会主義』執筆に至るその思想形成の検討を通じ考察する。

事件についての報道

2月6日の事件の中心となったのがどのような勢力であったのか、当時の報道では、各紙の解釈は必ずしも一致を見ていない。共和主義右派の新聞『ル・タン』は例えば2月8日の紙面で、示威行動の中心となったのは、退役軍人全国連合（U.N.C.）を始めとする退役軍人組織、火の十字架団ら極右団体、共産党員、社会党員らであり、これに一般市民が加わったと伝えている。論説は世界恐慌以来の不況に対する政府の経済政策の遅れ、スタヴィスキー事件で明らかになった政府高官の汚職などに対する市民の正当な怒りを出来事の核として指摘している。そして論説は、警官隊に発砲を命じた組閣されたばかりの急進社会党ダラディエ政府が武力による解決を選択することで、その道徳的権威を回復不可能なまでに失墜させたと主張する。さらにこの政府の横暴の背後には、急進社会党が1932年以来選挙協力をし、議会内多数派を維持するために譲歩を強いられる社会党の影響、そして社会党が当時協調姿勢を模索し始めていた共産党イデオロギーの影

までが指摘されている[5]。

また、『ル・タン』は、社会党系の『ル・ポピュレール』紙が同日の紙面で事件について、「ファシストの暴挙は不発に終わった」と論じ、社会党が共産党に対し反ファシズムのための共闘を呼びかけている点を取り上げ、社会党はファシズム打倒を口実に、「赤色ファシズム」を樹立しようと目論んでいるのであり、6日の出来事はその序曲であろうとまで述べている。

ジャン・ジョレスによって創刊され、1920年以来共産党の機関紙となっていた『ユマニテ』は、彼らが躊躇わず「ファシスト」と呼ぶ極右の愛国主義団体が、議会制打倒を目指し暴動を起こしたと報じている。2月7日の一面の大見出しは、「ファシズムに抗して、ファッショ化するデモクラシーに抗して、パリの労働者は反撃した！」となっている。『ユマニテ』は、事件当日の紙面で動員を呼びかけた退役軍人共和主義連盟（A.R.A.C.）を始めとした共産党員が示威行動を行なったことにも言及している。しかしそれは、詐欺師スタヴィスキーと繋がりのあった警察総督シアップの更迭を事実の隠蔽工作に過ぎないとし、その逮捕を要求し、かつ予定されていた極右団体のデモを牽制することを目的としていたのであり、彼らは労働者を抑圧する警官隊の横暴、極右の扇動家たちに見事に対抗し、反撃に成功したと讃えられている[6]。

フランスのファシズム

そもそもフランスにファシズムが存在したのか否かという問題については、歴史家の間でも解釈が分かれている。ルネ・レモンを始めとした歴史家は、フランスに存在したのは王党派、ジャコバン主義的愛国主義、ボナパルティズムなどであって、1936年のジャック・ドリオを党首としたフランス人民党発足以前にはファシズムは存在しなかったと主張している[7]。ゼーヴ・ステルネルは『ファシズムイデオロギーの誕生』において、フランスにとってファシズムとは外国産のイデオロギーに過ぎないという通説を退け、1911年頃に確認されるソレル流の組合主義と、アクション・フランセーズに代表される旧来のナショナリズムの融合がイタリアにおいて

ファシズムイデオロギーの生成を可能にしたと語っている[8]。しかし、例えば、かつてモーラスの片腕であったジョルジュ・ヴァロワのフェソーがソレル流組合主義の継承者を自認していたことが事実だとしても、大資本家の資金援助を受けていたフェソーが支持層拡大のためのデマゴギーのレベルを超えて、どこまで真剣に社会主義を志向していたのか疑問が残るであろう。『1934年2月6日』の著者、セルジュ・ベルスタンは、事件を受けて国民議会議員によって組織された調査委員会、また人権連盟が行なった、示威行動に参加した退役軍人全国連合（U.N.C.）、火の十字架団（Croix-de-Feu）、愛国青年同盟（Jeunesses Patritotes）、アクション・フランセーズ（Action Française）、フランス連帯団（Solidarité Française），フランス再建（Redressement Français）などの団体代表へのインタビューに基づき、事件の原因、性質、展開などについて詳細な検証を行なっている。ベルスタンもまた、当時の社会党、共産党などの左翼がその脅威を訴えていたように、これら極右団体による示威行動を、1922年のイタリアにおけるファシストのローマ進軍に比較することが妥当だろうかと問うている。結論としてベルスタンは、これら団体は、準軍事組織的性格、党首への忠誠を至上とする権威主義、不況によって最も打撃を受けた中流層の利益への配慮、腐敗した政治体制への批判などの点において、ドイツやイタリアに確立したファシズムと極めて類似した性格を帯びていたが、ラ・ロック中佐やピエール・テッタンジェールの掲げる綱領は、全体主義体制の確立などの明確なプログラムに乏しく、またこれらの人物には権力掌握を目指し、独裁を実行する強い意志が決定的に欠けていたと指摘している。ベルスタンはこれら極右団体に、潜在的ファシズムを確認するに留めている[9]。

他方、議会の調査委員会の報告に基づいたベルスタンの分析からは、数の上で示威行動の中心勢力であったのは、全国に90万人、パリ近郊だけでも7万2千人の会員を持つ、退役軍人全国連合（U.N.C.）、また全国に3万5千人、パリ周辺に1万8千人の団員を抱え（国民統合という支持団体は13万人を集める）、旧出征兵以外の団員を多く募り、退役軍人組織から極右団体へと変貌をとげつつあった火の十字架団（Croix-de-Feu）だったことが

わかる。そしてベルスタンは、より小規模な、共産党系の退役軍人共和主義連盟（A.R.A.C.）、これを介した共産党員の示威行動への参加は微弱なものであったと分析している[10]。

反ファシズム知識人監視委員会

周知のように反ファシズム知識人監視委員会は、2月6日の事件に警戒心を強めた知識人が、ピエール・ジェロームの呼びかけのもと、民族学者ポール・リヴェ、哲学者アラン、物理学者ポール・ランジュヴァンを中心に、1934年3月に発足させた組織である。「労働者よ！」と題されたその宣言には、1934年末には6000名を超える署名が寄せられたと言われる。監視委員会には、ニザン、ブルトン、マルローら1932年に設立された革命的作家芸術家協会参加者も名を連ねているが、これは急進社会党を支持していたアラン、ランジュヴァン（さらにベルジュリ）らの名が示す通り、共産党主導で組織された団体ではない。

監視委員会は1935年に『ファシズムとは何か』という冊子を出版しており、そのなかで、ファシズムには実は明確な教義は存在しないとことわった上で、イタリア、ドイツにおけるその誕生、展開の過程から、次のような共通した特徴の抽出が試みられている。1. 武力組織、軍隊の活用。2. 権威主義。3. ナショナリズム。4. 大資本との連帯。5. 疑似社会主義。6. 社会主義の弾圧である[11]。

この『ファシズムとは何か』における論考は、監視委員会メンバーによって1934年末までに発表された『ファシズムの社会主義的主張』や『大資本の力と2月6日の暴動』などの小冊子における分析を基盤として構成されている。

1934年7月に刊行された『ファシズムの社会主義的主張』では、経済危機を脱するために、ドイツ、イタリアで実施されている行政権の強化、コルポラティズムの導入が解決策となるだろうというフランス保守勢力のなかに見られ始めた「疑似社会主義的」政策の模索に強い警戒が促されている。ひとことで言えば、「ファシスト国家は社会主義を実現しつつある」と

いう言説がデマゴギーに過ぎないことを証明しようという試みである。例えば、『ファシズムの社会主義的主張』によれば、イタリアが極端な不況に見舞われていた第一次大戦直後の1919年にムッソリーニは、反資本主義的政策を公言し、工業や金融業において株式会社、大資本を解体し富の再分配を行なうこと、公共交通機関の運営を労働組合に委ねること、相続税の大幅な引き上げなどを約束していた。しかし1921年頃から労働運動が弱体化し始めると、ムッソリーニは、大資本家の支援を受け、労働者組織を壊滅に導こうとし、国家の市場への介入を認めない自由主義経済を推奨することになる。ところがローマ進軍の後、政権に就くと、ムッソリーニはローマ銀行などの大手銀行に対する大掛かりな財政援助を行う一方で、労働者の所得税を増税した。奢侈品税は50%引き下げられ、所得に対する累進課税は徐々に撤廃されていったとされる[12]。

反ファシズム知識人監視委員会のジョルジュ・ミションが、1934年10月以前に発表した『大資本の力と2月6日の暴動』は、2月6日の出来事は、大資本家に支えられた極右団体によって事前に計画されたものであり、愛国主義者やパリ市民による自然発生的暴動ではなかったと主張している。1932年の総選挙による急進社会党を中心とした左翼政権の成立は、富裕税の導入や、一部産業の国有化などの政策案によって大資本家を恐れさせた。1933年初頭、電力・石油会社経営者であり、同時に右翼団体フランス再建の名誉会長である大資本家、エルネスト・メルシエは、議会政治を激しく批判し、強権的な独裁制の必要を口にしていた。そして、1934年2月6日にもデモに参加する、納税者連盟や経済救済委員会などに実力行使を求めていた。全国納税者連盟の全国代表ラルジュは、「われわれは、ブルボン宮と呼ばれる陰謀家たちの巣窟へ向けて行進するだろう。われわれは必要とあらば、鞭や棍棒をもって無能なものたちの議会の大掃除を試みるだろう。」(『納税者の目覚め』1933年2月) と語っていた[13]。

ファシスト社会主義

『新フランス評論』の3月号には、この事件に関する複数の評論が掲載されている。この時代の『新フランス評論』は、さまざまに異なった思想、対立するイデオロギーが奇妙に混在する雑誌となっており、混乱を深める戦前のフランス社会を見事に映し出していたと言えるだろう。特定の哲学的思考（実証主義）や政治的イデオロギー（社会主義）、商業的成功の追求に拘束されることなく、作家が繊細な自己意識について自由な探求を行なうという、創刊当初の理想からの逸脱として、すでに1933年のアンドレ・ジードの共産主義への接近は、雑誌に多くの大ブルジョワの定期購読者を失わせていたが、1934年の時点でも、「政治的情熱なしに政治について語る」という政治問題に対する「ふさわしい距離」が取り戻されていたとは言い難いようだ。1933年10月号にはトロツキーのナチズム批判である「国家社会主義とは何か？」が掲載されていたが、1934年2月号には、ドリュ・ラ・ロシェルがベルトラン・ド・ジュヴネルらとともに1月にナチスによってドイツに招かれた際の体験を綴ったベルリン滞在記を寄せ、ナチス兵士が行進中に歌う歌を美しいと語っていた[14)]。

この3月号には、同年11月に『ファシスト社会主義』に収録されることになる「ドイツの測定」が発表されているが、やはりドリュの「34年2月の状況」は「今月の世情」と題された欄の冒頭を飾っている。ドリュの言葉は、「歓喜の叫び」に限りなく近い。ドリュはこの2月6日と9日に、パリの街頭で「男の名にふさわしく、友愛に値するすべての人々に出会った」と語っている。彼が語る友愛に値する人々とは、示威行動に参加していた愛国主義者と共産主義者である。

> 共産主義者と愛国主義者、それは同じことではない... しかしそれでも彼らは、互いにすぐ近くにいたのだ... 火曜日の午後10時頃のある時点で、ロワイヤル通りにおいて、11時に発砲事件の起きるコンコルド広場へと流れていく群衆のなかで、ひとびとの歌う「ラ・マルセイ

エーズ」と「インターナショナル」が混ざり合っていたのだ。僕はこの瞬間がずっと続いて欲しいと願った[15]。

ここに見られる対立するはずの極右極左両陣営の示威行動における混在の印象から、ドリュにとってのファシズムの理想を極右と極左の自然発生的な融合という相のもとに捉えることも不可能ではないだろう[16]。しかし、このドリュの印象とは反対に、調査委員会が聴取を行なった目撃者はすべて、共産党員の暴動への参加者はごく少数であったと証言し、そのなかのひとりは、インターナショナルの歌声は「大平原のただなかにおける雄鶏の鳴き声」に等しかったと語っていた。『ファシスト社会主義』の最終部「道程」において、自身がフランス再建に参加していたことに言及し、全国納税者連盟のロミエとの親交にも触れているドリュは、『大資本の力と2月6日の暴動』においてミションが検証する大資本家と結びついた極右団体による暴動の計画を知らなかったと考えるべきだろうか？[17]

実際、事件から数ヶ月後に単行本にまとめられる『ファシスト社会主義』では、異なった視点から状況が考察されている。

『ファシスト社会主義』は1933年から1934年にかけてドリュが、『新フランス評論』、『ヌーヴェル・リテレール』、『若者の闘い』など複数の雑誌に発表した政治評論を集めた著作であり、以下の6部から構成されている。第一部「マルクスに抗して」、第二部「フランスの状況」、第三部「独裁に抗して」、第四部「戦争と革命」、第五部「ドイツ」、第六部「道程」。この書物が全体として伝えている考察を大きくまとめるならそれは、共産主義（とりわけマルクス主義）への批判、少数のエリートが権威主義的政府によって行なう新たな社会主義への賛同、国家社会主義政党創設の提案、そしてヒトラーのドイツの状況分析とヨーロッパ全体の地政学となるだろう。

2月6日の事件が考察の対象になるのは、第二部「フランスの状況」においてである。この第二部は1934年3月に書かれた一章「2月の諸事件あるいはシーソー」と1934年7月の日付を持つ二章「街頭の言葉」からなって

いる。第一章はさらに六つの節に分割されるが、第一から第三節ではいわゆる右翼と左翼がそれぞれ二つの異なる要素から合成されていると示される。右翼を構成する二つの要素とは、アクション・フランセーズが代表する議会制打倒を願う過激なナショナリストの世界である。もう一方は、保守的な共和主義の世界である。アクション・フランセーズの世界は、腐敗した議会制に対して鋭い批判を叫ぶが、せいぜい4万世帯に影響力を持つだけであり、2月6日の事件に際しても、極右団体としてのアクション・フランセーズは、大きな役割を果たさなかったとされる。ただし、アクション・フランセーズの世界は、地下に根を張り、火の十字架団や愛国青年同盟の30万から40万世帯の支持層と繋がってもいる。そしてこの過激な反議会制を訴える世界は、より広範な保守的共和主義者の世界に囲まれており、この第二の世界は、総選挙の際には、全投票者数の半数近くの票を獲得するのである。

左翼が立脚している二つの世界とは、社会党支持者の世界と急進社会党支持者の世界である。左翼は、右翼よりも平和の維持に関してより積極的な姿勢を示すことで、有権者の支持を得ている。この世界は、一見すると経済上の利益よりも、社会問題の解決を優先させているが、ジャコバン主義的ナショナリズムに背を向けているわけではない。

第三節では、これら右翼の世界と左翼の世界が完全に分断されてはおらず、双方とも民主主義的議会政治と資本主義経済という軸に結びついている限りで、繋がってもいると主張される。そしてこの両世界の絡み合いを引きはがそうとするのが、左右それぞれの世界の過激な要素、アクション・フランセーズの代表する反議会制を求める要素と、資本主義を否定する共産党という要素である。しかしこれらの要素はどちらも自らに近い世界を牽引することができない[18)]。

これに続く第四節は「12日は6日に等しい」と題され、2月6日の暴動および12日の左翼によるゼネストが分析の対象となっている。ドリュは、『新フランス評論』3月号に発表された「2月の状況」に語られていたように、共産党員と愛国主義者の混在、さらには共闘の「事実」を素描しよう

とするのだろうか？　答えは否である。アクション・フランセーズも共産党もともに、それぞれが関わる右翼の世界、左翼の世界を自らのイニシアチブで決定的に変貌させるに至らないと解釈されている点は、「2月の状況」における分析とほぼ同じである。明らかに異なっているのは、「2月の状況」においては、両グループはロワイヤル通りにおいてすぐ近くに在った点が強調され、空間内における両者の混在が、観察者ドリュに共闘の可能性を夢見させていたのに対し、『ファシスト社会主義』の「6日は12日に等しい」においては、6日の行動はもっぱら極右団体の側に帰せられ、共産党の参加がマージナルなものであったことが指摘されている点である[19]。

それでは「2月の状況」の末尾が期待させていたように（「一体誰が、これら二つの勢力がこのままの状態に留まるだろうなどと言うのか？　寝ぼけた奴らだ！」[20]）、将来におけるこの極右団体、共産党のそれぞれの影響力の拡大、さらには両者の融合が、この「ファシスト社会主義」では可能だと、あるいはどれほど困難であろうと必要だと主張されているだろうか。この点について、「プロレタリアの党の無力」と題された第五節の論考は、共産党に新たな勢力形成に向けた一切の有効性を認めていない。ドリュが第六節「国家社会主義政党」を通じて創設を提案しようとするのは、左右両ブロックの再編によって可能になる党であるが、イタリア、ドイツのファシズムを参考に検討されているのは、プチブルジョワからなる中流層の支持を基盤とした社会主義を標榜する党である。そしてこの党は、おそらく左右両ブロックの勢力地図の上でこれまで急進社会党が占めていた位置に想定されている。この新たな党の可能性は、1933年6月の日付を持つ第一部「マルクスに抗して」においてすでに言及されていた。「しかしさらに先に進むべきである。フランスにおいて、新たな中道の党が急進社会党に取って代わるだろう。そしてこの党は教会とフリーメイソン、資本主義と組合主義、右翼と左翼、平和主義の偽善と帝国主義の陰険さとを混ぜ合わせるだろう。この党は、モスクワやベルリンのようにではないとしても、ローマにおけるように導かれるだろう。」[21] 1934年3月の日付の付された第二部第六節「国家社会主義政党」は、『ファシスト社会主義』全体の

中核をなす節である。ここにおいてもこの新たな党は、左翼にありながら限りなく保守派に接近可能な急進社会党が、硬直化し、疲弊した従来のあり方を脱し、社会主義にも開かれることで生み出されると考えられているようである[22)]。

ドリュは、ガストン・ベルジュリとの親交について、『ファシスト社会主義』最終部の「道程」において幾度も言及している。ベルジュリは急進社会党のなかにあって、社会党との共闘の必要性を提案し、急進社会党を離党し、「共同戦線」というグループを立ち上げたことで知られるが、ベルジュリの周囲にいた「若き急進派」と呼ばれた、マルティノ＝ドゥプラ、ベルトラン・ド・ジュヴネル、エミール・ロッシュ、ピエール・ドミニクらは当時、権威主義的国家の建設、コルポラティズムの導入、国家による経済統制など極端な提案をしており、その傾向はときに、1933年に社会党の党籍を失ったマルセル・デアらのネオ・ソシアリズムに比較される[23)]。ジュヴネルは1936年以降、ドリュとともにフランス人民党に加入しているが、1933年には「アクション・フランセーズ」紙にも寄稿したことのあるピエール・ドミニクもまた、ファシズムに強い関心を示し、後にフランス人民党に参加している。ドリュは『ファシスト社会主義』最終部「道程」において、二人との関係を手短に語っている[24)]。実際ドリュは、1934年1月に、ジュヴネルらとともに「独仏友好のための青年相互理解委員会」の一員としてベルリンに招かれており、2月の暴動以降、ジュヴネルの主催する雑誌、『若者の闘い』への寄稿を始めている。そしてドリュは、この雑誌の6月10日16号までほぼ毎号に評論を発表することになる。さて、『若者の闘い』がどのような傾向を持っていたのかを考える上で、ベルジュリの「共同戦線」との関係を確認することは無意味ではない。ドリュは『若者の闘い』6月3日号において、ベルジュリの「共同戦線」参加者に自らの思想を受け入れてもらえず、社会党との協調に傾く彼らにファシスト扱いされ、仲違いした経緯を語っている[25)]。しかし、これは『ファシスト社会主義』執筆中のドリュが、反ファシズムを掲げ、人民戦線へと合流して

行く「共同戦線」の姿勢を少なくとも1934年6月の時点までは共有していたということを意味するのではない。この本に収録される1933年以来の評論が明らかにしていたようにドリュは、急進社会党内に生じた社会主義への接近を、自身が「資本主義－ナショナリズム」と呼ぶ軸の方へと導こうとしていたのではないだろうか。他方、『若者の闘い』において「共同戦線」を批判することで、ドリュが同時に『若者の闘い』の方針からも離反して行くと早急に断じることはできない[26]。実際、ジュヴネルは、1934年5月の『若者の闘い』において、ベルジュリを中心に組織された「若き急進派」グループに最早自身が属していないと断言しており、ピエール・アンドルーは、「共同戦線」への強い反感を表明しているのである[27]。ベルジュリの「共同戦線」とジュヴネルの『若者の闘い』の両者が、共産党－社会党－急進社会党の連合として生成する人民戦線へ向かう路線を共有していたと見なす限り、1936年のジュヴネルやアンドルーのフランス人民党への参加も、『ファシスト社会主義』においてドリュが叫ぶ、国家社会主義政党創設への訴えの射程も不明なままに留まるのではないだろうか。実際、『若者の闘い』にはファシズムを批判する記事は皆無であり、反対に多くの論説がドイツやイタリアの社会主義的政策に学ぶべき点を探そうとしているのに対し、「共同戦線」の刊行する雑誌『矢（La Flèche）』は、反ファシズムを大きなスローガンとして掲げ、社会党と共産党の統一行動（l'Unité d'action）を支持している。例えば、1934年8月の『矢（La Flèche）』の創刊号において、ベルジュリは、「国家社会主義はその真の姿を露にする」という評論を書き、ドリュや『若者の闘い』の一部の論説が評価していたイタリア、ドイツにおける社会主義政策が、偽りに過ぎないことを厳しく非難している[28]。2月6日の事件についても、『若者の闘い』は、政府の武力行使によって政治運動とは無関係な若者が犠牲になったことを糾弾し、退役軍人組織が誇示した愛国主義に同調していたが、『矢（La Flèche）』は、これを、親ファシスト的な反動勢力、アクション・フランセーズ、火の十字架団、愛国青年同盟らの指導者によって組織された暴動だと見なしているのである。『矢（La Flèche）』の編集委員には、ベルジュ

リの他、反ファシズム知識人監視委員会のランジュヴァンがいる一方、ドリュ、ジュヴネルが寄稿した形跡はない。議会制打倒を求める極右団体の愛国主義や、ファシズムに対する評価がふたつのグループを大きく隔てている。ドリュの『ファシスト社会主義』は、社会主義の必要性を察知して急進社会党から離反し、ベルジュリの傍らで部分的にファシスト的傾向を見せ始め、ベルジュリに共闘を拒絶されたものたち、社会党を除名されたネオ・ソシアリスト、さらに火の十字架団を始めとした愛国主義的極右組織を潜在的な聴衆として発せられた新党創設の呼びかけだとは言えないだろうか。

『新フランス評論』3月号に発表され、『ファシスト社会主義』に収録された「ドイツの測定」（第6部）では、既存の社会党との連合を退けるドリュが社会主義を思考するにあたって、ドイツ、イタリアで掲げられていた「社会主義的政策」を積極的に参照していることがわかる。そしてこの社会主義は、国家による市場介入、部分的経済統制を通じて実現される一方で、資本主義を覆すものではないことが強調されている（「社会主義は資本主義的建築物のなかに入り込むのであり、これを転覆はしない」）[29]。ドリュは、『ファシスト社会主義』のなかでは、マルセル・デアやアドリアン・マルケらのネオ・ソシアリズムについて、ごく手短にしか触れていないが、この本に再録される評論を『若者の闘い』に発表し始めたのとほぼ同時期の1934年1月以降、アンリ・ド・マンの影響を感じさせるデアらの雑誌『新人』への寄稿を開始し、1935年9月までに四つの評論を発表している。バルテレミー・モンタニョン、マルケ、デアは、1933年7月の社会党全国大会で、社会党の採るべき新たな方針について講演を行い、レオン・ブルムらにそのファシスト的傾向を強く批判され、結果として党を除名されている。それらの講演は『ネオ・ソシアリズム、秩序、権威、国家』と題され同年10月に出版されている。彼らの提言を大きくまとめるなら、労働者だけでなくプチブルジョワからなる中流層をも考慮した政策の実施、ナショナリズムの承認、（ドイツ、イタリアを手本とした）権威主義的政府

による部分的経済統制の実施、コルポラティズムのような新たな組合組織の参照などである[30]。『若者の闘い』は1934年4月以降、『オルドル・ヌーヴォー』、『エスプリ』、『新人』などの雑誌を刊行する多くの政治・文化組織に、共闘の呼びかけを開始するが、デアもまたジュヴネルが同誌で行なう青少年に対する教育の充実などの提言に賛同する論説を『パリ－ドゥマン』紙に書き、これが同誌に再録されている[31]。また、1934年5月20日以降、『若者の闘い』は巻頭の編集者一覧のなかに『新人』の編集者であるジョルジュ・ロディティの名を加えている。そしてドリュは、1934年5月の『若者の闘い』14号に発表した「ドゥーメルグ政権下」において、火の十字架団とデアらのネオ・ソシアリズムが協調することで、新たな勢力が形成されることを夢見ているとまで語ることになるのである。

> ネオと火の十字架団について語ろう。僕は公然と、この不均質なふたつの運動の接近を見るという夢を育んでいるのだ。火の十字架団には男たちがおり、ネオには思想がある。火の十字架団は、ナショナリズムを口実にした大資本家の奸計に騙されまいとする、すべての健全なブルジョワジーを味方につけることができる。ネオは、第二インターナショナルあるいは第三インターナショナルをも信じず、プロレタリアの優越もフリーメイソンも信じないすべての左翼を味方につけることができるのだ[32]。

デアはドリュの夢見たファシスト政党を創設するどころか、1936年のサロー内閣に入閣し、その後人民戦線にも協力することになるのだが、ドリュは少なくとも1934年後半から1935年にかけて組織としてのネオ・ソシアリズムにファシスト社会主義実現へ向けた可能性を見ていたようである。

さらに権威主義的政府樹立、中流層を排除しない社会主義実現、ナショナリズム確立の必要性などの点をめぐる両者の理論的近接性を根拠として、フランス人民党参加以前の1935年末までにドリュが求めていた社会

主義をネオ・ソシアリスト的であると指摘することもできるだろう。そしてドリュは1935年9月の『新人』に寄せた評論「新たな忠誠」で、火の十字架団の下部組織であるヴォロンテール・ナショノーのネオ・ソシアリズムへの合流を歓迎することになるのである。この点に関して、ドリュの主張を非現実的と捉えたり、その立場を孤立したものと考えるべきではないだろう。なぜなら、ベルトラン・ド・ジュヴネルもまた、1935年8月に『ユーロップ・ヌーヴェル』誌に発表した評論において、デアらネオ・ソシアリズム提唱者を媒介とすることで、ドリオとベルジュリのあいだに生まれつつあった新たな協力関係を発展させ、火の十字架団を離反したヴォロンテール・ナショノーの一部団員をも迎え入れる新組織を創設することを提案しているからである[33]。

ベルジュリは急進社会党を後にし社会主義への接近を試みていた。また、ドリオはフランス人民党結成以前、コミンテルンやフランス共産党の路線変更に先立って、共産党を社会党、急進社会党との連携に導こうとしていた。デアは急進社会党の支持層である中流層の利益を守ろうと主張し社会党を除名されていた。そしてベルジュリとデアは人民戦線に協力さえしている。ここから、ベルジュリ、デア、ドリオの三人は、いずれも1940年以降ドリュと同じく対独協力を行なうとはいえ、巨視的に見るなら、1936年の人民戦線によって実現する大きな左翼連合にとっての先駆的運動をこの時点において形成していたと考えることも不可能ではない。さらにこれら3人とドリュとの間に個人的または思想上の交流があったことから、30年代後半のドリュのファシズム思想を、既存政党の枠組みを取り払う左翼再編の動きのただなかで生み出されたひとつの可能性と捉える誘惑が確かに存在する。しかし、『若者の闘い』、『新人』に発表された評論が示しているように、この時期のドリュの政治思想は、極右勢力をも呼び込むナショナリズム、反共産主義という軸に沿って、胎動する左翼再編のダイナミズムを思考しようとしていたということは見逃されるべきではない。

註

1) *Vu*, "Pas d'anarchie!", le 8 février 1934, numéro hors série. 後に見るように、この号には同時期に週刊誌『若者の闘い』を創刊するベルトラン・ド・ジュヴネルが、"La Croix de Feu, une force d'ordre disponible" と題された、2月6日の事件で発揮された火の十字架団の潜在力を評価する非常に挑発的な評論を寄せている。ドリュ・ラ・ロシェルもまた、同じ号に "La confusion dans la nuit" と題された時評を書き、『新フランス評論』に掲載される評論とは異なった視点から暴動を報告している。*Vu*『ヴュ』は同年1月号において、フランスドイツ友好のための青年相互理解委員会によるベルリン訪問を報告しており、ジュヴネルとともにナチス兵士に面会したドリュの印象を綴った "Les deux jeunesses" を掲載していた。

2) 例えばクレミューは、「2月6日をめぐる仮説」と題された論説を発表しており、午後8時に起きた最初の警官隊による発砲に自ら立ち会った経験を語りながら、暴動参加者が体現していたのはファシズムではなく、「前ファシスト的精神性」であるとしている。そして市民のなかに蠢くこの精神性が、暴動を煽動しようとした極右団体によって回収されてしまわないように、左翼の側も信用を失墜させた議会主義に権威主義的修正をもたらすべきではないかと論じられていた。*La Nouvelle Revue Française*, mars 1934, pp.537-545.

3) Georges Bataille, "La structure psychologique du fascisme", texte repris dans les *Œuvres Complètes*, tome 1, Gallimard, pp.339-371. バタイユはこの評論を二部にわけ『社会評論』に発表しており、その第一部は1933年11月に掲載されている。バタイユがこの評論を執筆するきっかけとなったのは、1933年1月のヒトラーによる政権掌握であり、2月6日の暴動ではない。

4) 例えば、バタイユの散文作品のプレイヤッド版責任編集者、ジャン＝フランソワ・ルーエットは、小説作品『空の青』を注釈しながら次のように記述している。« Tès choqué par l'insurrection du 6 février 1934, Bataille prend ses distances avec Cercle communiste démocratique, animé par Borice Souvarine, qu'il juge inefficace, et qui s'effondre. » *Romans et récits*, Gallimard, 2004, p.1038. 本稿第二部でも確認するように、バタイユは民主共産主義サークル解散後、同サークルのの同志たちと、コントル・アタックを結成している。また同サークルは、同時期に東部独立共産主義連盟との連合を模索し、2月12日のゼネストに際して共同で労働者への呼びかけを行なっているが、バタイユもこれに賛同していたと言われる (Cf. *L'Apprenti sorcier*, textes, lettres et documents (1932-1939), rassemblés, présentés et annotés par Marina Galletti, la Différence, 1999,

p.107.)。つまり、2月6日以後もバタイユはサークルと行動を共にしていたことになる。暴動をきっかけとしてバタイユがサークルを離脱したというルーエットの表現は、多くの点で誤解を招きかねず訂正が待たれる。

5) *Le Temps*, "Soirée de troubles sanglants à Paris", le 8 février 1934.

6) *L'Humanité*, "Paris ouvrier a riposté", le 7 février 1934.

7) René Rémond, *La droite en France de 1815 à nos jours*, Aubier 1982, p.205.

8) Zeev Sternhell, *Naissance de l'idéologie fasciste*, Seuil, 1989, pp.108-111.

9) ベルスタンは以下のように分析している。« En attendant, la description que nous avons faite des ligues et des associations diverses qui manifestent le 6 février correspond-elle aux exemples de fascisme qu'on peut connaître dans l'Europe de l'époque? A cette question, il semble qu'on puisse répondre en admettant que bien des traits de ces groupements les apparentent aux fascismes allemand et italien. Même recrutement au niveau des groupes sociaux atteints par la crise économique, et en particulier des classess moyennes ; mêmes mots d'ordre sommaires contre les politiciens incapables ou corrompus...Autrement dit, la crise globale que connaît durant les années 30 la société française y aurait fait naître une virtualité fasciste, développé les troupes d'un éventuel fascisme auquel aurait manqué la volonté politique de le concrétiser véritablement. » Serge Berstein, *Le 6 février* 1934, Gallimard/Julliard, 1975, pp.80-81.

10) *Ibid.*, pp.48-61.

11) *Qu'est-ce que le fascisme? La France et le Fascisme*, Comité de vigilance des intellectuels anti-fascistes, 1935.

12) *Les prétentions sociales du fascisme*, Comité de vigilance des intellectuels anti-fascistes, juillet 1934.

13) « Le 28 janvier 1933, à Magiv-City, M. Large, délegué général de la Fédération nationale des Contribuables, annonce des manifestations de masse : « Nous entreprendront, dit-il, une marche convergente vers cet antre qui s'appelle le Palais-Bourbon et, s'il le faut, nous prendrons des fouets et des batons pour balayer cette Chambre d'incapables.» (*Réveil du Contribuable*, février 1933) » Georges Michon, *Les puissances d'argent et l'émeute du 6 février*, 1934, p.6.

14) « Alors, tout d'un coup, on déclare que la pauvreté, c'est très bien. On se met en rangs, quatre par quatre et l'on s'en va chantant. L'Allemagne hitlerienne chante à pleine gorge et s'enivre de son beau chant, et elle se vante de son ventre plat.»Drieu La Rochelle, "Une semaine à Berlin", *N.R.F.*, février 1934, p.393.

15) «Communistes, patriotes : ce n'est pas la même chose...Ils étaient pourtant bien près les uns des autres. A un moment, vers 10 heures, le mardi, dans

la rue Royale, dans la foule qui se ruait vers la Place de la Concorde pour subir la grande pétarade de 11 heures, on chantait pêle-mêle, la Marseillaise et l'Internationale. J'avais voulu que ce moment durât toujours.» Drieu La Rochelle, "Air de février 34", *N.R.F.* , mars 1934, p.568.

16) 有田英也は、その浩瀚なドリュ伝『政治的ロマン主義の運命』において、2月6日の経験によってドリュのなかに明確化するファシズムのヴィジョンをこのような観点から捉えている。「開戦当時、人々はインターナショナリストからナショナリストに速やかに変貌したが、この二月六日夜に二つの歌が同時に歌われたという事実は、ナショナリストとコミュニストという二つの集団が、同じ時刻に同じ場所にいるというただそれだけの理由で融合したことを意味している。ドリュは「あれほど大勢のフランス人」とともに、集団への非理性的な融合感を味わったのである。」『政治的ロマン主義の運命── ドリュ・ラ・ロシェルとフランスのファシズム』、名古屋大学出版会、2003年、199頁。有田の研究は戦間期からドイツによる占領時下に至るドリュの思想の変遷を、同時代の多くの右翼政治思想に関わる膨大な資料の精査を通じ跡づけ、またさまざまな雑誌に発表された評論に単行本再録時にドリュが加えた修正までを具に検討した大作である。ただ、2月6日の事件を振り返るドリュの評論には、少なくとも『新フランス評論』の「2月の状況」(3月号)、『若者の闘い』の「二月の出来事についての考察」(2月25日付)、そして *Vu* 『ヴュ』に発表された「深夜の混乱」(2月8日号) が挙げられるが、極右極左の参加者の混在を強調しているのは、第一の評論だけである。「深夜の混乱」では、ドリュは退役軍人組織を思わせる隊列が旗を掲げ、「ラ・マルセイエーズ」を歌いロワイヤル通りからサントノレ通りへ向かうのを目撃している。ドリュはエリゼ宮を目指す彼らの行進に同行した後、隊列を離れマドレーヌ寺院の方角へ戻っている。ドリュはそこで共産党員の隊列に出会うが、彼らは「われわれは皆ソヴィエトだ。シアップを倒せ。」と叫ぶだけであり、ドリュの耳に「インターナショナル」は聞こえていない。「2月の状況」に記述される左右両派の混在を、両者の融合と解釈できるのか、あるいはすくなくともドリュには実際にそのように体験されていたと考え得るのか、今後より詳細な検証が必要とされるだろう。仮に「2月の状況」において共産党員の示威行動への参加の様態が誇張されているとしたら、その理由には、(1934年時点の) ジード、マルロー、フェルナンデズら多くの共産主義賛同者が寄稿する『新フランス評論』の当時の性格へのドリュの配慮が関係しているとは考えられないだろうか。

17) 示威行動への共産党員の参加についての調査委員会の報告は、Berstein,

op.cit., pp.177-178. を参照のこと。
フランス再建や全国納税者連盟のロミエとの親交については『ファシスト社会主義』第六部「道程」に、以下のように語られている。« Pourtant j'avais adhéré au Redressement français, mouvement qui n'était pas le premier ni le dernier dans la série des essais imbeciles de fascisme en France. Je croyais qu'il dégagerait un sérieux programme de collaboration des classes. Je vis MM. Valois et Romier s'évertuer vainement sous l'œil terne de quelques grands capitalistes... » *Socialisme fasciste*, Gallimard, 1934, p.226.

18) 共産党とアクション・フランセーズの左右両ブロックにおける無力について、ドリュは次のように述べている。« De deux côtés, il y a des éléments en l'air qui voudraient se séparer, mais c'est superficiel et sans lendemain-vélléités d'A.F. d'un côté, vélléités communistes de l'autre. L'Action Française peut-elle entraîner le bloc de droite? Le communisme, le bloc de gauche? Non et non. » *ibid.*, p.88.

19) « Et pas plus que le monde de l'A.F. il (le monde communiste) ne peut profiter des implusions qu'il donne ; bien au contraire. Les communistes ont d'abord réagi pour eux-mêmes, en marge du mouvement nationaliste. Ensuite, ils se sont ressaisis, prouvant leurs attaches avec le monde socialiste. » *ibid.*, p.91.

20) *op.cit.*, p.569.

21) *op.cit.*, p.60.

22) « Il faut donc créer une force nouvelle. Le rôle modérateur, intermédiaire, qui a été joué par le parti radical, héritier de la tradition jacobine et napoléonienne, ne peut plus être tenu par lui. C'est un parti sclérosé, usé, dérobé, qui ne peut se ressasir et qui s'appuie sur des institutions qu'il ne peut réformer lui-même, il doit être remplacé par un nouveau parti. » *ibid.*, p.95.

23) これは例えば、ベルスタンの行なっている解釈である。*op.cit.*, p.26-27.

24) *op.cit.*, p.227.

25) *La Lutte des Jeunes, numéro* 15, le 3 juin 1934. ドリュの記事は『若者の闘い』の一面を飾っている。そしてこれに寄り添う形で、ジュヴネルの「共同戦線」についての記事が掲載されている。ジュヴネルの文章からは、ベルジュリへの批判は伝わって来ないが、評論を締めくくるにあたり、ジュヴネルは、ベルジュリが「左翼の若者のことだけではなく、全ての若者のことを考えるべきだ」とし、自らの立場との差異を明確にしている。

26) 『若者の闘い』は創刊当時から、さまざまな政治思想を含んだ意見に自由な表現の場を提供することを方針として謳っている。とはいえ、巻頭頁は常に編集委員の記事で埋められており、ドリュももちろんそのひ

とりである。ジュヴネルは雑誌自体の方針を否定する記事を、自らの記事と抱き合わせで巻頭に掲載するだろうか。ドリュの最後の寄稿となった「優柔不断なものたちの共和国」は、翌週6月10日16号のやはり巻頭に掲載されているのである。有田英也は、ドリュのベルジュリへの決別宣言は、ジュヴネルとの確執をも意味していたと解釈しているようである（前掲書193頁）。確かに、ドリュはこの6月10日号を最後に、『若者の闘い』への寄稿を止めている。しかし、これは、ジュヴネルの伝記作者、オリビエ・ダールが詳述するように資金不足が原因で雑誌自体がその後二号を刊行しただけで7月には廃刊になっているからでもある。ドリュの名は、最終号7月14日18号まで編集委員の一覧のなかに見られるということを指摘しておく。他方、オリビエ・ダールは、ジュヴネルをファシストと呼ぶのは行き過ぎであるとしながらも、ファシズムに強く魅了されていたと判断している（Cf. Olivier Dard, *Bertrand de Jouvenel*, librairie Académique Perrin, 2008）。ベルジュリ、ランジュヴァンらの「共同戦線」が雑誌『矢（La Flèche）』で打ち出す反ファシズムの政治姿勢は、『若者の闘い』のそれの対極にあると言ってよいだろう。

27) Bertrand de Jouvenel, " Que font les Jeunes-Radicaux à Clermont-Ferant? ", *La Lutte des Jeunes*, numéro 10, le 7 mai 1934. ピエール・アンドルーは、6月3日の15号において、『若者の闘い』のこの号が「共同戦線」を特集することに抗議している。*Ibid.*, numéro 15, le 3 juin 1934, p.6.

28) Gaston Bergery, " Le National-Socialisme montre sa vraie figure ", *La Flèche* de Paris, organe central de "Front Commun", numéro 1, le 1er aout 1934.

29) *op.cit.*, p.210.

30) たとえばマルセル・デアは講演のなかで述べている。« Et, tandis que cet anti-parlementarisme exerce ses ravages, les classes moyennes en révolte, résolues à résister à la crise et à se sauver, trouvent alors un idéal dans le fascisme. Car nous nous tromperions du tout au tout si nous nous imaginions que le mouvement fasciste n'est pas autre chose qu'une espèce d'entreprise de mercenaires au service des intérêts du grand capitalisme qui veut se défendre et se maintenir. Si le fascisme n'avait été qu'un mouvement de mercenaires au service des intérêts bancaires ou industriels, jamais, ni en Italie, ni en Allemagne il n'aurait développé dans le peuple en désarroi le dynamisme, le mouvement d'idéal que nous sommes bien obligés de reconnaître qu'il a suscités. » "Discours de Marcel Déat", *Néo-Socialisme? —Ordre, Autorité, Nation—*, Grasset, 1933.

31) *La Lutte des Jeunes*, numéro 7, le 8 avril 1934.

32) "Sous Doumergue", *ibid.*, numéro 14, le 27 mai 1934. もう一方でドリュは、

1934年6月の『若者の闘い』において、デアやマルケらの指導者としての力量を疑問視する発言をしていることも事実である。Cf. "L'Homme (Gaston Bergery)", *ibid.*, le 3 juin 1934, p.1.

33) ドリュの『新人』への寄稿は、1934年1月、1935年1月、1935年3月、1935年9月の四回にわたっている。1935年3月の "Grosses Echéances" は雑誌の巻頭を飾っているが、そこでは「ナショナルな」党の創設の必要性が強調されている。ヴォロンテール・ナショノーとネオ・ソシアリズムの連合についての評論は、「新たな忠誠」La Nouvelle Fidélité と題されている。ドリュの論調は明らかに、ドリュが『新人』*L'Homme Nouveau* グループの内部からヴォロンテール・ナショノーを歓迎していることを伝えている。Drieu La Rochelle, "La Nouvelle Fidélité", *L'Homme Nouveau*, numéro spécial, 1er septembre 1935, p.7. なお『新人』にはフィリップ・ボニュー、アンドルーなどドリュ以外の『若者の闘い』執筆者もとりわけ同誌の廃刊以降寄稿しており、両グループの接近を物語っている。ジュヴネルの評論は以下を参照のこと。Bertrand de Jouvenel, "Rassemblement des démissionnaires ?", *L'Europe Nouvelle*, 10 août 1935, p.771-772.